

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 奥井復太郎の都市社会調査と未完の都市研究                                                                                                                                                                                              |
| Sub Title        |                                                                                                                                                                                                                   |
| Author           | 川合, 隆男(Kawai, Takao)                                                                                                                                                                                              |
| Publisher        | 三田社会学会                                                                                                                                                                                                            |
| Publication year | 1997                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997. ) ,p.56- 60                                                                                                                                                        |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 特集II: 奥井復太郎の都市論                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0056">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0056</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 奥井復太郎の都市社会調査と未完の都市研究

川合 隆男

### (1)はじめに

1996年12月末に出版社の大空社とご遺族の方々のご協力を得て山岸健さん、藤田弘夫さん、小生との共監修で『奥井復太郎著作集』(全9巻)の刊行にこぎつけえたことは幸いなことであった。1997年は、奥井復太郎(1897.11.21-1965.2.16)の生誕百年の年にあたり、また没後30余年も経過していることになる。

著作集は第1巻・社会思想論、第2巻・社会政策論、第3巻・都市論(1)(都市史・都市社会学)、第4巻・都市論(2)(都市社会調査)、第5巻・都市論(3)(現代大都市論)、第6巻・都市論(4)(商店街研究・国土計画論・戦時都市論)、第7巻・都市論(5)(戦後都市論・都市と文学)、第8巻・国民生活論・教育論・その他、それに別巻(追悼、思い出、解題、履歴、著作目録など)より構成されている。このうち第4巻・都市論(2)に収録された奥井の都市社会調査についての「解題」は、小生が担当しており、『別巻』に収められているのでご参照いただきたい。

今回の著作集の編纂にかかわって感じることは、都市研究を中心にそこに刻み込まれた奥井の倦むことのない旺盛な研究活動と執筆活動である。奥井の都市研究、なかでも都市社会学の試みは、その先駆者の試み——さまざまな模索、挑戦、遍歴——の例にみるように、当初から定立されている学問・研究分野での研究活動ではなく、さまざまな研究遍歴のなかから自ら開拓していったものであった。

しかし、奥井の著作集の刊行が一段落し、いま現にその著作集を手元であらためて読み直してみて、考えたことは次のようなことであった。小生も含めて、奥井の都市社会学をめぐるこれまでの位置づけや評価は、主に『現代大都市論』(1940年)を中心に「一貫して独自の研究と調査をおしすすめ」たわが国の先駆的な都市社会学の展開、戦前の都市社会学の「ひとつの到達点」、として位置づけることが多かったが、それらは研究史上の位置づけに留まり奥井の都市研究の内容とそれらの展開そのものについての丹念な再考察は今日まで試みられないままではないのか、ということである。奥井は、旺盛な研究活動を試みつつも、戦局がますます厳しくなっていく状況で「学生局主任主事」をつとめつつ、「研究」「教授」「学生指導」の三本建の仕事をめぐる煩悶し、「自分は元来、研究的な人間だと思っている」、「……教授と指導と研究の三本建でみれば研究が一番適していると思う」と書いた自筆原稿「或る仕事感——自己の場合」(1943年)を残している(『著作集』第8巻所収)。戦後になると学部長や塾長、国民生活研究所長など数多くの要職をも経験し、自らの研究活動や著作活動をいまいちど顧みる間もなく、急逝してしまっている。

それに加えて、われわれの勉学や研究関心も時代とともにあまりにも忙しく、これまでの業績や先達の足跡をいとも気軽に「過去」のもの(あるいはいとも易しく「ポスト……」なもの)としてくくり、「新」と「旧」との線引きをしてはいないだろうか。

ここでは、奥井の都市研究を「未完の都市研究」という視点から、再考察が試みられるべきいくつかの点を覚書きとして(極めて片寄った思い込みと評されるかもしれないが)考えておきたい。

## (2)奥井復太郎の都市社会調査

著作集第4巻に収められた主に1933年頃から1939年頃までの奥井の都市社会調査に関しては、前述のように『別巻』にその「解題」を書いたので、ここでは少し異なる観点から奥井の都市社会調査の特徴を考えてみたい。

奥井の都市社会調査を調査研究として発表論文の形でみれば、「大都市に蜷集する知識階級に就いての統計」(1933年)あたりから始まって、「工場地帯」「盛り場」「大都市生活圏」「都心地形成」「学生生活調査」「学生街」「大都市近郊」などについての具体的な諸調査をこころみていった一方で、他方では「大都市研究の基本調査に就て」(1935年)「地域的社会調査に関する若干考察」(1936年)などの都市社会調査論、調査方法論に関する論稿も残している。高野岩三郎らによる内務省衛生局『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告』(1921年)、山口正『都市生活の研究』(1924年)、今和次郎らの考現学の試み、戸田貞三『社会調査』(1933年)などの近代日本社会調査史上の展開期を経つつ、戦時下への動きのなかで奥井の都市社会調査は、都市社会学の構想と都市現象の実証的な解明という基本的な視座をもって繰り広げられていった。今日の社会調査に比すればいまだ素朴で単純なものといえるものもあるが、個々の具体的な調査それぞれが型にはまった調査ではなく、「個」と「全体」についての奥井の着想、奥井の想像力豊かな創意工夫に満ちた調査の試みであり、しかも当初の既存統計や調査資料を再利用した統計調査から、鎌倉町調査(1937年)にみるように自らの実地調査を試みていった。このような奥井の社会調査の展開に関して過去の調査としてくくってしまうのではなく、急速に変貌しつつある今日の都市状況にあってなお、広く社会的構想に関しても、調査方法論上でも、また調査過程論上でも、再考察すべき点が多いのではなかろうか。

同僚の社会学者加田哲二は、奥井復太郎を評して、「都市社会学の奥井復太郎氏、氏は現在、米国流のフィールド・ワークを独力で実行しようとする熱心家である」(『三田新聞』1936年5月8日付)としていたが、戦局の厳しい戦時下においても、また戦後においても、社会観察や社会調査への関心、そのさまざまな試みは衰えることはなかった。『現代大都市論』(1940年)以後の諸調査にあたる学生調査、商店街研究、「幼少年工」の作文を通じてみた生活状況調査、戦後になってからの都市学会や国民生活研究所の関連で試みられた北九州、その他の数多くの都市調査なども、奥井の都市社会調査の特徴をあとづけ

再考するうえでは、丹念に読み解いていく必要があるだろう。

奥井の生涯にわたる都市社会調査の試みという展開で考えてみると、町人商人の家に生まれ下町や本郷界隈で過ごした幼少年期の自らの直接の現象・風物・情景の経験と観察が、奥井の都市社会調査を特徴づけているといえる。これは、奥井のヨーロッパ留学時における主にドイツを中心にした中世都市やヨーロッパ諸都市の探訪体験とも重なっている。

「明治東京の性格(都市生活史についての覚書)」(1953年)、「明治・大正・昭和の私」(1960年)などにもそうした背景や原体験の一面が刻み込まれている。また、「荷風と東京——都市社会学の立場からみた荷風の作品——」(1959年)のなかで、「……大正9年に卒業しまして都市研究のテーマをもらいますと同時に私が友にすすめられて手にしましたのが荷風の「日和下駄」なのであります。これは都市文学の作品として驚くべきものだということをそれとなく感じとってのもであります」と語っているように、奥井は早くから文学作品や芸術作品、ヨーロッパの社会思想なども関心を強く寄せていたのである。その意味では、調査論・調査方法論上からいうと、量的／質的調査方法、統計的／事例的方法、個人的データ／構造的データ重視等々をめぐる、ある特定時点での調査の特徴としてのi)単一直線型・特化型の調査、ii)それらの相互補完型・媒介型(マルチ・メソッド型、トライアンギュレーション型)の調査の試みとしてよりも、奥井はわが国の大都市構造の形成と変動を長期にわたって、生涯にわたって自らの直接の生活経験や観察を土台にしつつ統計調査、事例調査、個人的データや構造的データ、人工的調査と自然的調査、作文や文学作品などの活用をも含めて、むしろi)やii)に限定されないiii)循環型の調査を試みようとしていたといえないだろうか。

### (3)都市研究と市民生活

奥井の都市論は、生涯を通じて社会思想、歴史、理論、実証研究、文学、計画・政策などの広範囲に及ぶが、当初に都市社会学を構想するにあたっては、わが国の都市研究・都市問題研究をめぐって三つの時期、三つの位相(あるいは観点)を位置づけていた。すなわち、第1期は「市政論」の時期、第2期は「都市経営論」の時期、第3期は「社会現象、文化現象としての都市」を問題対象として、「都市そのものについての全体的把握」を試みようとする「都市の社会学研究」の時期(都市社会学の時期)として位置づけて構想され、それは『現代大都市論』(1940年)に集大成された。

しかし、その『現代大都市論』の章構成、「緒論・都市の本質、第一章・都市理論・都市社会学、第二章・現代の典型的大都市、第三章・大都市の地域的構成、第四章・大都市社会・その構成と特質、第五章・都市計画、結論・現代大都市の文化と問題」にも示されているように、すでにこの当時に「土地(地域)、人間、社会」の関連、「計画、生活、景観」の関連を考える「都市計画」にかなりの関心を示していたのである。奥井は後年の論文「都市研究への回想」(1959年)のなかで、また「都市理論の再検討」(1962年)のなかで

も、「年代的前後を伴って四つの観点」があり、「第一は文明評論、第二は市政論、第三は市経営論、第四が都市社会学である」として、更に「……今日わたくしはこれに新しくもう一分野をつけ加えたいと思う。すなわち、ここに第五分野として登場するのは計画論である」としていた。戦中にも国土計画を論じ、終戦直後にも「都市計画」の論文(1948年)を書き、その後も各地の都市の総合調査にも参画していった動きに照らしても、これまでの奥井の都市研究の位置づけは多くは奥井の都市社会学を対象としており、奥井の都市計画論を再考察する課題は依然残されているのではなかろうか。

奥井は、わが国の都市研究において都市の支配機能、中枢的機能を中心とした奥井の都市社会学の構想し、更に、それを踏まえて都市計画論の重要性にも積極的に関心を傾注していく。「都市研究への回想」や「再論『現代大都市論』」(1963年)には、単に「回想」「再論」とも異なる関心や視点が渦巻いているようにもわたしには思える。漸く定立されたわが国の都市研究、都市社会学がますます専門分化細分化し、総合性を見失っていく傾向、同時に都市研究が、日常の生活者として「 Tendenzen のぎ」に喘ぎつつも人間性・人間の尊厳・共同性・生活理想をもつ「市民生活」から乖離していく傾向についての奥井の反省であり痛烈な批判ではなかろうか。晩年の講演「都市づくりと市民」や北九州マスタープラン作成などとの関わりなどにおいて、市民生活とその生活向上を重視し市民の創意、自主性、協力を基点とする奥井の姿勢と重なるものであろう。奥井の「生活論」「都市生活論」「国民生活論」とも連なるものであり、早くも「市民論」(1929年)を書いていたが、都市研究の早い時点から「市井の人」の生きる「市民社会」としての「都市社会」を構想していたのではないだろうか。

今回の著作集の『別巻』に収録された奥井の「身内集団と他人集団」(1962年)は、国民生活研究所内で開かれた講演(漫談講話)の速記録であり活字化されたのは今回が初めてである。C.H.Cooleyの「第一次集団」「第二次集団」、W.G.Sumnerの「内集団」「外集団」などの概念との類似を思わせるが、奥井による「身内集団」(縁故集団、特定個の世界)と「他人集団」(公共集団の普遍個の世界)はやはり彼独自の社会集団論の試みであり、奥井は二つの集団における「秩序」、「調達」、「措置」の相異を解明しようとしており、身内集団、他人集団のような「眼で現在の大都市の社会的な構造というようなものを、他人集団という角度から、そうしてその反対物である身内集団との対照において説明していくと、かなりいろいろのことが分かるんじゃないか」という指摘も興味深い。日本社会論としても面白いし、日本社会論の閉鎖性をうち破る契機をもっているのではなかろうか。

#### (4)大学と地域社会

わが国の社会学者、都市社会学者のなかで、奥井復太郎ほどに学生や学生街、大学と地域社会に関心を寄せた人物は少ないのではなかろうか。今和次郎による考現学の視点からの学生持物調べ、学生ハイカラ調べ、学生風俗記録、大学ぐるり調べなども子細な観察記

録として興味がつきないが、奥井による大学と地域社会への関心ももっと注目されてよいのではなかろうか。

「学生の日常生活に於ける「動き」の調査」「学生生活の思想的方面の一調査」(1935年)以降開始されていく奥井らの学生生活調査は、戦時下における全国的な学生生活調査や思想調査の動きとも呼応するものでもあったが、奥井は学生街の社会学的考察として学生たちとともに「三田」社会調査、学生街調査を持続させていった。「社会性の地理的条件——地域社会学に於ける狭少の意義」(1936年)を論じ、そのなかで、奥井は「学生街は中心のある街である。学校を中心として合成的有機的に形成された街である。しかるに、三田の場合にはそれが全然、孤立しているのであるからして、学生街の成立する可能性が無い」と断じていた。しかし、終戦後も都市計画論との関係で「三田文教地区」計画に強い関心を示していたし、美術や芸術を好みモリスやラスキンを愛読し研究をもし、都市景観や都市美にも強い興味をいだいていた奥井は「僕の学園理想」(三田通りに一大ビル、上の方は塾の施設)(『三田新聞』1957年9月11日付)を描いていた。わが国の都市研究や都市社会学のなかに、大学・大学院と地域社会との関連や在り方を問う研究がもっと積極的になされる必要があるのではなかろうか。

このように覚書きではあるが、奥井復太郎の都市研究をみてくると、集大成『現代大都市論』、ひとつの到達点としてくくってしまえない、生涯の都市研究に潜むいくつもの可能性をもつ「未完」の都市研究として再考察していくことができるのではなかろうか。更には、少し視点が異なり、しかも一朝一夕には試みることは不可能であり、わたしのようなものには到底できないが、人物論 奥井復太郎というテーマも魅力的である。奥井の茶目っ気振りをも感じさせる「《復生自伝》」(1957年)は学生時代までで中断してしまったが、明らかに福沢諭吉の『福翁自伝』を意識したものであったろう。もし途絶えることなく、書き続けられていたら、どんな『自伝』になっていたのだろうか。

「随想 新旧渺茫」は急逝のために奥井の絶筆となったが、学問の営みに於ける「新旧渺茫」をどのように受けとめていくべきなのであろうか。

(かわい たかお 慶應義塾大学法学部)